

秘川浪人伝

柴田錬三郎



徳川浪人伝

柴田錬三郎



新潮社版



徳川浪人伝

昭和四十三年五月二十五日 発行
昭和四十五年十二月十日 九刷

定価 五〇〇円

著 者 柴田錬三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(三)三〇一三(大代)

振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社

製本・大進堂製本所

© Renzaburo Shinted Printed in Japan 1968

徳川浪人伝

裴
幘

御
正

仲

草 露 風 葉

街に、春の風が、土煙りをまきあげていた。

その土煙りを、まっこうからくらって、

「うっ！ べっ！」

と、旅商人が、唾を吐き出した。

とたんに、

「こらっ！」

ものすごい嘔声^{おうせい}が、発した。

腰掛茶屋の床^{とこ}几^ぎに、あぐらをかいていた髭^{ひげ}だらけの浪人者であった。

「おのれ！ それがしの槍に、なんの遺恨^{いこん}があって、唾を吐きかけ居った！」

横にたてかけていた、おそろしく長い槍を、ひつつかんで、仁王立ちになった。

「遺恨などとは、とんでもない。……つい、気がつきませず——」

「黙れっ！ それがしが、ここに居るのが、目に入らなかつたとは云わせぬぞ。この槍をなんと心得る。わが父天堂寺左近が、太閤秀吉殿下の股肱^{ここ}として、この槍をふりかざして、戦場をかけめぐること百七十度び、敵将の首級をあ

げること三十七。——その子たるわが身にとっては、妻子にもかえがたい宝物であるぞ。それをなんぞ、士農工商の最下等に属するおのれ如きいやしきやからの唾を吐きかけられては、我慢ならぬ！ それへ、直れ！ 亡父の榮譽にかけて、成敗してくれる！」

うそぶきたてた浪人者は、その長槍を、りゅうりゅうとしごいて、びたりと、商人の胸もとへ、突きつけた。

旅馴れた商人には、もちろん、浪人者のこんなたが、見えすいていた。

見えすいてはいたが、相手の烈火の憤怒^{おんぬ}ぶりに対して、——どうせ、金が欲しいのだから。

といった態度をかえすと、本当に生命をとられる危険があった。

あくまでいんぎんに、武士に対する敬意とおそれをもって、詫^わびを入れて、なるべく安あがりて、放免されるようにつとめなければならぬ。

「申しわけございませぬ！ なにとぞ、ご成敗ばかりはお許し下さいませ。てまえ、国許に、十二人の子をのこして居ります。来年は、十三人になる予定でございます」

商人は、土下座して、地べたへ額をこすりつけた。

「おのれの家庭の事情など、きいてもはじまらん！ 宗旨を申せ。それによって、引導を渡してくれる」

浪人者は、商人ののどへ、穂先をふれさせた。

その時——

「辰馬、止せ。むだだぞ」

背後から、声がかかった。

ふりかえった天堂寺辰馬は、着流しでふところ手の、長身の浪人者を見出した。

「なんだと？ なにが、むだだ？」

「そやつを、ただの商人と思うのか、辰馬。目がないぞ」
長身の浪人者は、笑った。

とたんに――。

土下座していた商人が、猫のすばやさで、逃げ出そうとした。

「こやつ！ 逃げるかっ！」

天堂寺辰馬が、長槍をふりかざして、躍起に追おうとした。

しかし、商人の足は、おそろしい早さであつた。

あつという間に、三間もひきはなした。

商人は、虎口を完全にのがれた距離とさとりや、ひょいと、首をまわして、

「ざまみやがれ！」

と、あびせた。

瞬間――。

商人は、あつと、悲鳴をあげて、ひっくりかえつた。

片足の甲に、小柄が突き立ったのである。

長身の浪人者が、歩み寄って来ると、

「それを抜いて、返せ、波乗り佐兵衛」

と、云って、左手をさし出した。

商人は、痛みをこらえながら、

「織田重四郎様でございましたな、お手前様は――」

「おぼえていたな」

織田重四郎と呼ばれた長身の浪人者は、小柄を受けとると、

「まだ、盗賊をやって居るのか、佐兵衛？」

と、問うた。

「いまは、ごらんの通り、ずぶかたぎの葉売りでございますよ」

「しらばくれるな。一昨日、岡山城下随一の両替屋に、賊がしのび込んで、千両箱をぬすんで逃げた、と大層な噂であつたが、どうやら、その手口が、三年前、小倉城下を荒した波乗り佐兵衛のそれと、同じであつたな」

織田重四郎は、そう云って、笑った。

商人に化けた盗賊は、手ばやく、傷口をしぼっておいで、

「お手前様には、敵いませぬ。観念いたしました」

両手を地べたにつくと、

「半分――五百両で、ごかんべん下さいませうか？」

と、申し出た。

「渴しても、盗泉の水は飲まぬ、と云いたいところだが……

金は欲しい」

織田重四郎は、云った。

「おい織田、そやつ、盗人か」

天堂寺辰馬が、大股に寄って来て、

「盗人なら、遠慮することはない。そつ首を刎ねて、盗み

金を取り上げるのは、天下万民のためにもなるぞ」

「盗賊の上前をはねるのは、武士の面目にかかわりはせぬか」

「冗談ではないぞ。上前をはねるのではない。盗み金ととりかえてくれるのだ」

「とりかえしたならば、盗まれた家に返してやらねばなるまい」

「織田！ われら浪人者は、飢えて居るのだぞ。誰が好んで、街道で、追い剥ぎのまねなどして居るか。飢えて居るから、やむを得ず、手段をえらんで居れぬのだ。……どうするのだ、こやつを？」

辰馬に問われて、重四郎は、こたえた。

「おれの、むかしの知りあいだ、この盗賊は——」

波乗り佐兵衛は、天堂寺辰馬をうながして歩き出した織田重四郎を、

「もし——」

と、呼びとめた。

重四郎は、ふりかえって、佐兵衛を視た。

「佐兵衛、もうそろそろ、あぶない吊り橋を渡るのは、止せ。年齢が年齢だぞ」

「織田様。今夜は、どこへお泊りでございますか？」

「たぶん、三石宿だ」

「旅籠へ、お約束の金子を、お持ちいたしましょう」

「呉れとは云わぬが、欲しくないと云わぬぞ」

重四郎は、云いすてた。

辰馬は、肩をならべると、

「おい、織田——。あの盗人めが、約束など守ると思うのか。なぜ、ここで、金をとりあげてしまわぬのだ？」

と、なじるように云った。

「こちらが、約束したわけではない。むこうが、申し出たのだ。あの男は、約束は守るだろう。ただ、こっちが、受けとるか、受けとらぬか——ためらいがあるだけだ」

重四郎は、こたえた。

「どうも、お主という人間は、よくわからん」

辰馬は、首を振った。

知りあってから一年あまりになるが、辰馬は、まだ、重四郎の素姓を知らなかった。

重四郎は、なぜか、語るのを避けていたのである。

織田と名のるからには、あるいは、織田信長に縁つづきの家の出身かも知れなかった。その風貌にも、ただの浪人者たちがつた気品があった。

態度にも、毅然としたところがあった。腕も立った。天稟に加えて、なみなみならぬ兵法修業をしたふしも、うかがわれる。

辰馬は、興味をもって、つきあって来たが、重四郎の胸中を視ることは、一度も、許されていなかった。

——なにか、ただならぬ志をひそめているのではないのか？

そういう疑いも、わいていた。

二人は、ここ半年あまりは、広島城下はずれの古利に居

候していた。

重四郎が、急に思い立った様子で、

「京へ上る」

と、云い出したので、辰馬もついて来たのであった。

岡山城下で、路銀が、尽きた。

浪人者のみじめさは、旅の途次で、すこしずつ工面しなければならぬことであつた。

重四郎が、旭川の護岸工事で、二派にわかれて争っている人足組の一方の用心棒に、十日ばかりやとわれ、その前金を辰馬がもらつて一足さきに、岡山をはなれていたのである。

辰馬は、姫路で、なにかの臨時仕事にありついて、重四郎を待つことにしていたのである。

重四郎は、どうやら、人足組の用心棒がいやになつて、後金をすてて、わずか二日で出て来た様子である。

春の風は、しきりに、二人の浪人者へ、土煙りをあびせてゆく。

重四郎と辰馬が、峠ふたつを越えて、三石宿へ着いたのは、日が昏れてからであつた。

旅籠が三軒あるだけのさびしい宿場であつた。

三石から三里で、有年坂峠に至る。そこからは、姫路藩であつた。

「織田、京でおちつくつもりか？」

夕餉をすませた時、辰馬がたずねた。

「いや、いずれ、江戸へ出る」

「江戸へ出て、何をする？」

「まだ、きめて居らぬ」

「お主の腕前なら、町道場をひらけるが……」

「そんな気はない」

「どうも、わからん」

辰馬が、首を振つた。

「わからん、とは？」

「お主のことがだ」

「おれは、これだけの人間でしかないが……」

「いや、ちがう。お主は、われわれ、食いつめ浪人とは、どこか、ちがう。お主の胸の裡には、何か、かくされて居る。そうに、ちがいない」

「そう思うなら、そう思つてくれていてもよい」

「それだ。その云いかただ」

「正直でない、と云うのか？」

「というよりも、お主は、自分と世間とのあいだに、距離を置いて、冷やかに物事を眺める余裕を持つて居る。飢えた人間には、そんな余裕はないはずだが、お主は、いつも、おちつきはらつて居る。そこが、われわれとは、どこか、ちがうのだ」

「……」

重四郎は、こたえずに、月の光がおちて来た山峽へ、目を置いてゐる。

その横顔は、おどろくほど端整であつた。

「寝るか」

辰馬が、すこしやけくそぎみに、云った折であった。

「二階のお客さまあ、たずねて来た人が、ありますよ」

階下から、声がかかった。

「上げてくれ」

重四郎が、こたえた。

「あの盗人め、約束を守り居ったの」

辰馬は、重四郎を視て、首をひねり、

「お主は、盗人にまで好かれるふしぎな魅力を持って居るのか」

と、云った。

部屋に入って来たのは、しかし、波乗り佐兵衛ではなかった。

旅装束の若い女であった。

商家の内儀ふうにつくっているが、よく光る切長な双眸そうぼうにも、すっきりした襟もとあたりに、仇っぼさがうかがわれた。

そこいらにさらに見かける容子ではなかった。

「さわと申します」

挨拶してから、

「佐兵衛さんにおたのまれして、おうかがいした者でございます」

と、告げた。

「佐兵衛は、どうしたのだ？」

重四郎が、たずねた。

「追手が、かかりまして、表街道を歩けなくなったのでこ

ざいます」

さわという女は、こたえた。

「それで——？」

「金子五百両、貴方様におとどけする約束を、やむなく、さきへのばして頂かねばならなくなったことを、お詫びしてくれ、と……。でも、お約束は、必ず、守って、お渡しつかまつる由にございます。それで、とりあえず、わたくしから、お渡しするように、と——」

さわは、懷中から、紙で包んだ金を取り出して、重四郎の前にさし出した。

「二十両ございます。……あとの四百八十両は、大坂で、お渡しいたしたい、と佐兵衛さんは、申しておいでございました」

「まるで、こっちが借金取りになったようだな」

重四郎は、笑った。

「いえ、佐兵衛さんは、その代りに、お願いの筋がある由でございます」

「なんだ？」

「貴方様のお腕前を、一度だけ、おかりしたいのだそうでございます」

「……」

さわは、重四郎を正視しながら、つぶけた。

「摂津伊丹に、神屋主膳という豪族の家がございます。伊丹で、平家館へいけだん、といえは、京大坂までひびいている名門でございます。その神屋主膳を仇とねらう者が居ります。そ

の者に、助太刀をお願いしたいのでございます」

「仇討をする者は？」

「当年十二歳になる少年でございます。姫路の城下はすれに、二十歳の姉と一緒に住んで居ります」

「豪族といえば、郎党も多勢やしなつて居るのだらう？」

「はい、館は、まるで、城構えだと申しますし、勿論、手勢をかかえていると存じます」

「そこへ、十二歳の少年をつれて、乗り込め、というのか。無理な相談だな」

そう云いながらも、重四郎は、平然としている。

「ばかれて居る！」

辰馬の方が、大声をあげた。

「みすみす斬られに、押し入るようなものではないか。話にならん」

しかし、さわは、まばたきもせず、重四郎を見つめて、

「お願いできませんようか？」

と、返辞をもとめた。

「その少年に会ってみなければ、なんとも、返答しかねる」

「お会わせいたします」

さわは、こたえた。

重四郎は、さわを見かえして、

「ところで、そなたは、ただのかたぎの女房とは見えぬが……？」

と、云った。

さわは、自分のことをきかれて、はじめて、目を伏せた。

「そなたも、盗賊仲間か？」

重四郎は、ずばりと、たずねた。

「わたくしの素姓は、どうぞ、ごかんべん下さいまし。佐兵衛さんの仲間ではございませんが、似たり寄ったりの者には相違ございません」

さわは、こたえた。

このおちつきぶりは、身に武芸がそなわっている証拠である。それも、尋常ではない修業でおのがものにしたに相違ない、と重四郎は、見てとった。

当時、若い女が一人で、道中するなどは、ふつうでは、考えられないことだった。

戦国時代のあららしい余風は、いたるところに残って居り、街道上に、斬られた死体が横たわっていても、さまで珍しくはない時世であった。

これを事件として、役人が吟味して、道中止めをするなど、かなり後世になってからのことであった。

この女は、若く美しい。

当然、道中にうろつく狂暴な手輩の狙うところになろうが、それをおそれず、平気で旅をしているのは、のびされた猿臂をはねのけるだけの自信があるからに、相違ない。

「では、明朝、出なおして参りまして、姫路まで、お供つかまつります」

さわは、云いのこして、去った。

「妙な女だな。ただ者ではあるまい」

辰馬が、云った。

「浮世に、食いつめた人間があふれて来ると、さまざまな奇形の者が現われて来るようだ」

重四郎は、そう云いつて、ごろりと仰臥すると、後頭で手を組み、じっと、天井を仰いだ。

常とはちがった光が、その双眸にたたえられた。

「お主、本当に、十二歳の少年に助太刀して、神屋主膳とやという豪族を、討つ気か？」

辰馬が、眉宇をひそめて、たずねた。

「なんとなく、承知してしまつたかたちになつたな」

「おいおい……、これは、人足喧嘩の用心棒になるのとは、ちがうぞ」

「勿論、わかつて居る」

「ひとつしかない生命を、むだに、あの世へ鞍がえさせることになるのだぞ」

「必ずしも、死ぬとは、きまつて居るまい」

「いや、きまつて居る。お主が、いかに腕が立っても、大名に劣らぬ手勢を擁した豪族館へ斬り込むなど、狂気沙汰だ」

「辰馬——」

「なんだ？」

「人間という奴は、おもしろいものだ。狂気沙汰と判つて居りながら、ふっと、それをやってみたくなる。そういう気持を起してみるのは、人間のおもしろさだ。そうは、思わぬか」

「冗談ではない。ばかばかしい。……おれは、まっぴらだ」

「お主までも、死出の途連れにしようとは、云わぬ」
深夜——四更（午前二時）を過ぎていたろうか。

「おい——」

ひくくおしころした重四郎の声が、辰馬に、かかった。

「おい、辰馬、目をさませ」

ゆさぶられて、辰馬は、「う、う……」と、うなつて、ねむりからさめた。

「なんだ？」

「しずかに——」

重四郎は、ちよつと沈黙を置いてから、
「起きて、身仕度せねばなるまい」
と、云つた。

「どうしたというのだ？」

「廊下で忍んで、われわれの寝息をうかがつた者が居る。」

……この旅籠は、包囲されている気配がある」

「包囲されている？ 何者どもに、狙われているのだらう？」

「わからぬ。ただ、そこいらのごろつきの輩とは、ちよつと質のちがう連中らしいことは、はっきりして居る」

「武士か？」

「まず——な」

「お主の方に、狙われるおぼえがあるのか？」

「べつに、こうまでもものしく包囲されるおぼえはない。しかし、狙われても、ふしぎはない過去は、持つて居る」

「まきぞえは、ごめんだぞ」

「もう、まきぞえになって居る。……ともかく、ふりかかった火の粉は、払わねばなるまい」

二人は、すばやく身仕度をした。

「敵は、幾人ぐらいと、みる？」

辰馬が、きいた。

「わからぬ。しかし、十人以下ということはあるまい。忍びの術を身につけているらしいから、手ごわい、といえる」
「こちらから、斬って出るのか？」

「敵は、夜明け前を、襲撃の時刻と、うちあわせているらしい。時間はあるから、こちらは、充分に、敵の裏をかくことができる」

曾て、このような危機に、しばしば、遭ったことがある重四郎のようであった。

すでに、どう動くか、思案は、成っていた。

重四郎は、辰馬の肩に乗るや、天井の張りじまいの板をはずした。

そして、辰馬とともに、天井裏にしのんだ重四郎は、ほこりのつもった梁をつたって行きながら、

「これが広い屋敷だと、血なまぐさい振舞いをせずに、脱出できるのだが……、やむを得ない」

と、云った。

空いている部屋をさがして、降りると、

「待つか、それとも、機先を制して、とび出るか——いずれが得策かな」

と、闇の中で、独語した。

辰馬は、重四郎の動くままに、順うよりほかに、すべを知らなかった。

山峡の深夜は、おそろしいほど、静寂の冷気が、はりつめている。

あと半刻あまりで、夜が明けようとする頃あい——。

重四郎と辰馬が寝ているはずの部屋へむかって、音もなく忍び寄ったのは、四人の男であった。

板戸を、さっとひきあけて、風の早さで、四人が、侵入した。

次の瞬間であった。

襲った者たちが、逆に襲われる事態が、そこに起った。

廊下から、一個の黒影が、四人の侵入者の背後に立ったのである。

はっ、となって振りかえった侵入者たちの狼狽は、けだし、重四郎たちももし襲われていたとしても、その狼狽にまさるものであった、といえる。

その狼狽ぶりを、充分に自らの利とする迅業が、織田重四郎にはあった。

闇の中に、人間の肉と骨を断つ音が、瞬時に、継続した。刃と刃の噛み合う金属音は、全くなかった。

辰馬が、そっと、首をのぞけた時には、重四郎一人が、室内に、立ちのこっていた。

「やったの！」

辰馬は、感嘆した。

四人を、一太刀ずつで斬り伏した腕の冴えは、舌をまくに足りた。

辰馬も、重四郎が、これほどのすざまじい手練の持主であるとは、知らなかった。

「闘いは、これからだ」

重四郎は、云った。

「表と裏に、四五人ずつがいる」

「お主のこの腕前なら、なんの造作もなく、斬り伏せられるだろう」

「そうは、かんたんには、いくまい。矢か鉄砲玉が飛んで来る危険がある」

「屋根から襲うか？」

「それも、よからうが……、おれが、表へ、堂々と斬って出る隙に、お主は、屋根つたいに、隣りの厩へ飛べ。継立馬をぬすんで、さきへ、逃げろ」

「いや、おれも——」

辰馬が、云うと、

「一人の方がよい。正直に云わせてもらうと、お主は、実戦には向かぬ男だ」

重四郎は、云った。

皮肉なことだが、見かけは、比較にならぬくらい、辰馬の方が、遅い偉丈夫で、敵をおそれさせるに足りた。

しかし、重四郎は、辰馬が意外に腰抜けであることを、看破していたのである。

「すまぬ！」

辰馬は、詫びた。

「おれが、斬って出たら、同時に、屋根を走れ」

重四郎は、そう云いのこしておいて、ゆっくりと、階段を降りはじめた。

階下にも、敵がひそんでいる、と予測してよかった。

重四郎の総身には、ひさしぶりに、はげしい闘志が、張りめぐらされていた。

敵の正体が不明なだけに、かえって、生命をむだには落せなかった。

「おのれら、何者ぞ！」

凄まじい一喝が、街道へ向ってあびせられたのは、それから、数分のもちであった。

十三夜の月明下に——。

誰何に応える鋭い矢唸りが、起った。

その瞬間には、重四郎は、おのが五体を、鞠のように、路上へころがしていた。

はね起きたせつなには、もう敵の一人を、まっ向唐竹割りに、斬り下げていた。

「意趣ならば、堂々と名のるがよからう」

重四郎は、八双にかまえながら、云った。

討手は、かなり距離を置いて、布陣し、沈黙をまもった。

闇が、うすくなっている時刻であった。

重四郎は、黒衣の討手たちのかまえを、見わたし、

「隠密、とみたぞ、おぬしら——」

と、云った。

それは凶星であつたらしく、討手陣は、猛然と、襲いかかつて来た。

これに対する重四郎の反撃は、旋風つむじに似ていた。

躍る。

斬る。

跳ぶ。

斬る。

重四郎の五体が翻天するたびに、そこに、屍がたおれた。

裏手にあつた討手がたが、走り出て来た時には、もうそこに生き残っていたのは、たった一人であつた。

その一人も、大きくのけぞるのを見て、新手は、うめきたてて、重四郎へ、斬りつけて来た。

重四郎は、走りはじめた。

辰馬が、自分のみ馬をとらず、厩から、二三頭、往還へ追いついておいたのを、重四郎は、みとめたのである。

その一頭へ、とび乗って、馬腹を蹴るはやさに、討手がたは、追いつけなかった。

重四郎は、まっしぐらに、馬をとばしながら、

——あれらが、公儀隠密たちであつたとしたら、どういうことなのか？

それを、考えていた。

公儀隠密は、使う剣は、柳生流である。柳生流に、虎乱という術がある。

これは、多勢をもって、一人の強敵を討ちとる時に、使う。

重四郎を包囲して、襲いかかつて来た討手陣は、その虎乱を使ったのである。

柳生流を知る重四郎が、見あやまるはずはなかった。

公儀隠密が、自分たち名も知れぬ浪人者を、ものものしい布陣をもって、討ちとろうとして来た。これは、かんに考えただけでは、すまされないことだった。

なにかの誤解であろう、と思いたいところであつたが、公儀隠密ともあろう者たちが、誤解するとは、考えられなかった。

それに——。

もう、七八人を斬り伏せてしまっている。

——いそがしいことになったな。

重四郎は、胸のうちに、独語した。

このおちつきは、性格の太さもあるが、死地をいくたびもくぐって来て、きたえられたためのものでもある。

重四郎を乗せた馬は、風のはやきで、有年坂峠を越えた。

峠下の腰掛茶屋のならんだ立場へ着いた時、路上へ、すっと立った者があつた。

さわという女であつた。

いつの間にか——夜のうちに、ここまで来ていたのである。

「旦那——、こちらへ」

うながす。さわの表情は、きびしい色をみせていた。
「なんだ？」

「ご案内したいところがございます」

さわが、云った。

いくばくかののち、重四郎は、さわと肩をならべて、かなり深い森を、くぐっていた。

重四郎は、この女の素姓に、興味をもっていた。

夜のうちに、有年坂峠を越えていたのは、三石のあの旅籠が、襲撃される、と感づいたからではないのか。

「そなたは、われわれが、襲われる、とどうして、判った？」

重四郎は、問うてみた。

「仔細は申しあげられませぬが、わたくしも、追われている身でございます」

さわは、こたえた。

「公儀隠密にか？」

「え？」

さわは、重四郎へ、視線を向けた。

「おれも、これで、いろいろな経験を、のそまずして、積まされて来た。あの討手たちが、公儀隠密であることぐらいいは、判る」

「……」

「そなたが、公儀隠密に追われている身ならば……、われわれが襲われた理由も、読める」

「……」

「そなたが、われわれをたずねて来たのを、公儀隠密たちは、知って、われわれを、そなたの一味と、思いまちがえた。そうではないのか」

「……」

「そなたが、公儀にたてつく何やらの徒党の一人であるとすれば、だ」

「織田重四郎様——」

「うむ？」

「貴方様は、そうと読みとりながら、いかにも、平然としておいででございます」

「あわててもしかたがあるまい。人間の運命というやつは、なるようにしか、ならぬ」

「でも……、やはり、わたくしどもには、不敵な御仁と存じられます」

「一味徒党にひき入れたい、と思っているのか。それならば、あきらめてもらおう。徒党を組むのは、好きではない。一人で生きているのが、気楽だと思つて居る。……そなたらが、時の強い権勢に反抗して、何やら、企てているのだ、とすれば、こっちは、なるべく、無縁でいたいものだ。面倒なことは、きらいな性分だ。……尤も、あの公儀隠密の追跡をかわして、そなたが、どこかへかくまってくれる好意は、すなおに、受けることにする」

重四郎は、一応、念を押しておいた。

人 生 花

さわが、重四郎を案内したのは、古びた寺院であった。山門など、ひと押しすれば、音たてて、崩れ落ちそうであった。

境内は、しかし、塵ひとつ落ちていなかった。

金木犀が咲いて、佳い匂いをただよわせている。

さわは、方丈の玄関に立つと、案内を乞うた。

若い納所が現われて、

「あ、これは、さわ様」

と、おどろきの表情をみせて、奥へ取次ぎに入った。

納所から、そう呼ばれるところをみると、氏素姓のある

女に相違ない。

さわと重四郎は、囲炉裏のある部屋へみちびかれた。

そこに、老僧がいた。

ただの僧侶ではない証拠は、額から眉間を割って、頬へ走っている凄まじい刀痕であった。

鼻梁高く、見事な風貌であった。前身が、勇武を誇った

高名の武将であらうか。

老僧は、さわを見ると、微笑して、

「三年ぶりかな。よう生きのびて居ったもののだ」

と、云った。

さわは、微笑をかえして、

「和上も、おすこやかで、おめでとう存じまする」と、挨拶した。

「十年、無駄に生きのびた。と申して、わりに死ぬこともないので」

「百歳までの長寿をお持ちなさいませ」

「百まで生きのびるとすれば、あと三十年もあるぞ。これは、もう面倒だ。さすがに、目もかすんで参ったし、耳も遠くなって来た。先日、井戸端で、足をすべらせて、したたか腰を打って、五日も起き上れなんだ。ぶざまなものだ、おいほれは……」

そう云ってから、老僧は、はじめて、重四郎へ、視線を向けた。

「お手前、昨夜あたり、人を斬られたかの？」

何者か、問う前に、すばりと云いあてた。

「血がにおいますか？」

重四郎は、べつに、あわてずに、ききかえした。

「むかし、さんざ、人を斬ったものでな」

老僧は、たんたんとして、こたえた。

「なんとなく、それがわかるのじやな」

「和上——」

さわが、真剣な面持で、

「この御仁を、四五日、おかくまい下さいませぬか。この御仁が、是非なく血闘なされたのは、わたくしのせいであ